

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03196

研究課題名（和文）国際移動と主観的ウェルビーイング：アジア系看護師の日英体験比較

研究課題名（英文）International Migration and Subjective Well-being: Comparative Studies on Experiences of Asian nurses in Japan and in the UK

研究代表者

浅井 亜紀子 (Asai, Akiko)

桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授

研究者番号：10369457

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：英国に移動したフィリピン人看護師の職場や生活における主観的ウェルビーイング（subjective well-being, SWB）を検討し、EPA制度で来日したフィリピン人の事例と比較検討した。滞在初期には英語を公用語として話すフィリピン人もイギリス英語習得とオンライン化した看護実践の習得に苦労していた。給与、勤務時間はSWBを高めるが、人種差別はSWBを低める。英国では、家族生活のW&Lバランス、看護師長まで昇格できるキャリア展望、人種差別禁止法、違反行為の報告システムが、永住滞在を促進する要因であった。日本でも、キャリア展望の道筋、配偶者ビザ制限の緩和、差別に関する法整備が求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際移動の研究は、経済学の枠組みからの研究が多く、移動者の主体性を重視しコンテキストを入れて解釈していく質的研究は少ない。また主観的ウェルビーイングは、ポジティブ心理学で広く適用されているが、国際移動にその視点を取り入れたものは少ない。本研究は、国際移動を主観的ウェルビーイングでみたときの影響因を抽出し、先行研究の欠陥を埋めることができた。

外国人労働者受け入れを進める上で、差別禁止などの法制度の整備、外国人移動者とその家族を受け入れるサポート制度の必要など実践的な示唆を得ることができた。国際移動を、移動前、移動後、将来的展望に至る自己の再編プロセスとして捉える重要性の示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The subjective well-being (SWB) of Filipino nurses who moved to the UK in the workplace and in their lives was examined and compared with the case of Filipinos who came to Japan under the EPA scheme.

Filipinos who spoke English as an official language in the early stages of their stay also struggled to learn British English and to master online-oriented nursing practice. Salary and working hours increase SWB, but racism lowers SWB. In the UK, the W&L balance of family life, career prospects with progression up to head nurse, anti-discrimination laws against racial discrimination and a reporting system for offences were factors that facilitated permanent residency. In Japan, career prospects pathways, relaxation of spouse visa restrictions and legislation on discrimination are also required.

研究分野：社会心理学

キーワード：国際移動 主観的ウェルビーイング アジア系看護人材 外国人労働者 イギリス フィリピン 日本

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 代表者らが行った10年間のEPAインドネシア人の調査から、帰国理由は結婚や親の病気であり、EPA開始時には予想しなかった家族やライフコースの問題があることがわかった。多額の税金を投入して育成したEPA人材が、合格後に日本で長く働けるか否かは重要な課題である。外国人看護師の日本への定住化を探るためには、職場や職場外の生活における主観的ウェルビーイング(subjective well-being, SWB)、つまり生活の満足度についての個々人の意味づけを検討する必要がある。

(2) SWBは、もともとDiener(1984)が見出した概念であり、経済、地位といった「客観的」な評価に対して、人生に対する個人の「主観的」な評価を表す。理論的には人生満足度、ポジティブ感情、ネガティブ感情の三要素から構成され(Diener, 1984 & 2000)、質問紙項目による研究が進められている。しかし、一時点での質問紙による評価では、その人の置かれたコンテキストとの関係、時間軸に沿った変化を捉えることはできない。コンテキストには、個人の心理要因(、マイクロ)、家族や職場との人間関係や組織などの社会的要因(メゾ)、制度、経済環境(マクロ)など多次元の要素を含める必要がある(浅井・箕浦, 2020)

2. 研究の目的

(1)本研究では、欧米で活躍が知られるフィリピン人看護師が、英国と日本においてどのようにSWBを意味づけているのかを比較検討する。これにより国際移動におけるSWBと影響因の理論の精緻化を図り、(2)外国人看護師の受入れの望ましい条件を探る。

3. 研究の方法

(1)調査方法と倫理申請

調査は、英国での調査、フィリピンでの現地調査、日本での調査からなる。調査にあたり著者が勤務する桜美林大学の研究活動倫理委員会の承認を得た(2018年8月)。英国では保健研究機構の倫理審査を受けるため総合研究申請システム(Integrated Research Application System)でオンライン申請し、承認を得た(2019年2月4日)。

(2)インタビュー調査

①インタビューは半構造化面接を行い、質問項目は、渡英前のフィリピンでの仕事や生活の経験、海外就労経験、英国の選択理由や試験、渡英後のOSCEの経験、仕事の苦勞、職場の人間関係、仕事外の生活、フィリピンの家族や英国での家族の様子、将来の希望を尋ねた。

調査対象

英国で働くフィリピン人看護師は、2018年11月から2019年7月にかけて英国の国営医療制度ナショナル・ヘルス・サービス(National Health Service, 以下NHS)の病院に勤務する看護師に半構造化面接を行った。調査協力者は25人で、男性7人、女性18人である。インタビュー時の平均年齢は24歳から68歳まで平均は35.9歳である。

日本で働くEPAフィリピン人看護師・介護福祉士は、2019年8月から2021年22月にかけて20人(+浅井3人)に面接をおこなった。そのうち2回以上行ったものは2人いる。平均年齢は36歳で、看護師は8人、介護福祉士は13人である。(2020年よりコロナパンデミックの影響があり、施設や病院での面接ができなくなり、人数に限りがある。)

分析は、修正版グラウンデッドセオリーを用いた。インタビューの録音をもとに書き起こし、言葉をまとまりごとに区切り、その内容を表す短い言葉(ラベル)を付けた。さらに関連するラベルをまとめ、抽象度の高いカテゴリーを作った。それらのカテゴリー間の関係を調べ、SWBに影響する要因について分析した。

(3) 現地調査

2022年2月28日より3月4日までマニラとミンダナオ島ダバオを訪問した。、フィリピン人看護師・介護福祉士の移動前と移動後の環境を知るために、フィリピン政府の関係者、日本語学校教員、介護士を送り出している大学関係者に聞き取りを行った。動機、日本のイメージ、送り出し状況を調査するために、フィリピン人EPA帰国者への面接を行った。特にEPAと特定技能実習制度を目指す来日者の特徴も検討するために、介護士として来日希望をしている希望者への聞き取りも行った。

4. 研究成果

(1) 移動前の経験：

英国での就労決定までには、看護学校選択、卒業後の職業選択、渡航先選択の3段階があった。協力者の半分は看護学以外を専攻したいと考えていたが親の勧めで看護学を選んでいった。母親の権限と看護師に対する「知的で特権的な表象」が影響していた。希望以外の専攻を選ぶことは自己実現のSWBを低めるが、一方で家族生活のSWBを高めていた。就職の選択においては、国内の看護職数の不足とコネによる就職慣行が常勤職を得る困難をもたらし、彼らのSWBを低めた。病院での良好な人間関係や看護スキル習得はSWBを高めるが、労働条件への不満、家族生活の不安がSWBを低め、海外就労を促進していた。

海外就労を決めたものがどのように国を選択するかは、母国の政治状況や送り出し政策、受け入れ国の政策などマクロな影響を受けていた。海外に家族や知り合いがいる「近接性」、受け入れ国の「開放性」や治安の「安全性」、賃金や教育費や渡航費などの「経済性」、家族の生活の「長期展望」など、総合的な SWB が高くなるよう国の選択が行われていることが明らかになった。

(2) 英国での経験

フィリピン人看護師の経験は、仕事領域、生活領域ごとに時間軸により変化していた(図1)。渡英後 3 カ月以内に EU 圏外の外国人看護師に課せられる看護実践能力試験 (Objective structured clinical examination) に合格しなければならず、それへの不安やストレスが強かった。職場では英国英語の発音や表現、母国と異なる看護手順に慣れるストレスがあった。しかし、2年から3年たつと、母国に比べ高い給与や、ゆとりある勤務時間、医者と対等に議論できる看護職の専門性、キャリア発展可能性に満足を感じ SWB を高めていた。一方、SWB を低める要因には、患者からの人種差別的態度、同僚からの曖昧な差別の扱いがあった。

4 年目以降は、生活では仕事と余暇のバランス、医療や教育が無料といった家族としての社会福祉の充実があった。母国の家族を支える喜びは、一貫して強かったが、長期化に伴い、母国の家族から離れる寂しさ、母国の家族の医療の質の低さへの不満があった。

SWB には、メゾレベルの受け入れ病院の労働環境、マクロレベルでの、外国人看護師受け入れ制度や法制度などの変遷の影響もみられた。

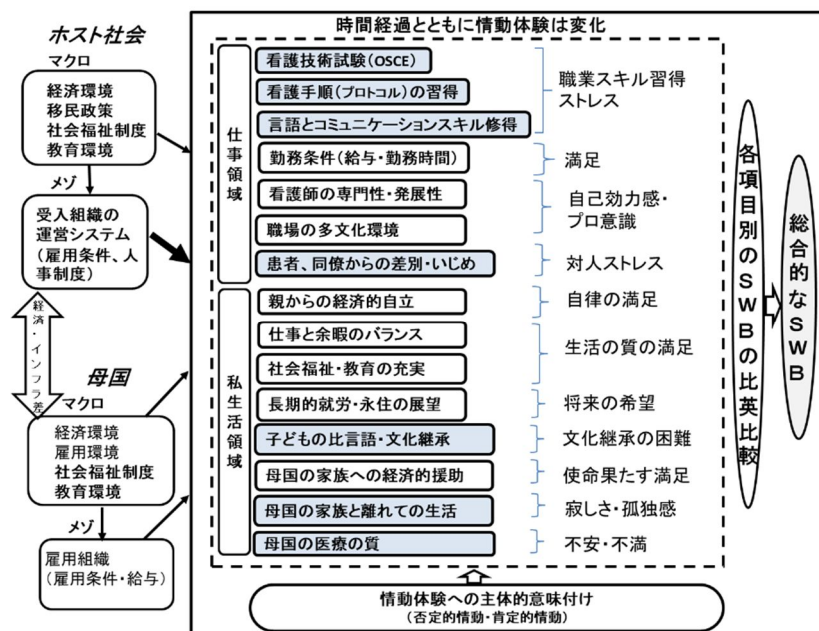


図2 フィリピン人看護師の SWB への影響因 (*色がついているのは SWB を下げる要因)

(3) 英国のフィリピン人看護師への差別とそれへの対処

英国で働くフィリピン人看護師の約半数が、雇用者、上司・同僚、患者から差別を認識しており、それらに認知的変化と行動的变化による対処方略をとっていた(表1参照)。

対処方略の選択は、差別へにどう意味付けするかによっており、差別の度合い、差別者との力関係、対処方略の知識・スキルが影響していた。組織での法制度の整備などマクロ環境も影響していた。

2010 年に差別禁止法が制定される以前に来英したフィリピン人看護師は、雇用者による不当な扱いに対し、ストライキをするなどして労働環境を変えた。職場を替えて回避する者もいた。2010 年の法制定以降も、患者からの差別はあった。また、上司から仕事の押し付けなどがあったが、「フィリピン人は勤勉で従順」というイメージがあるとフィリピン人看護師たちは認識していた。とくに新人看護師は、同僚や上司から多くの仕事を押し付けられることがあったが客観視し、来英目的は家族の援助と目標に焦点化することで一時的な認知の調整により対処したが、自己の再編はなされていない。家族中心の価値観は維持された。患者からの差別にはケア提供者として他者理解を深め、職務遂行をした。一方、長年勤務し競争的地位を得たマネジャーたちは差別を否定し、相手に率直に主張するなど差別と積極的に対峙するスキルを習得していた。英国での長年の経験により、差別に負けない、自己の再編を成し遂げたといえる。差別に対し報告するなど公的ルートを活用もみられた。

表1 在英フィリピン人が認識した差別と対処方略

	対処方略	内容	典型的な語り
認知的 評価 の変化	客観視	差別を限定したり、差別の普遍性を強調して客観的にみる	「差別する人も患者もいるが、ほとんどが静かで感謝している。」 「差別はフィリピンにもあるし、どこにでもある。」
	焦点化	差別に目を向けず、本来自分が達成すべき目標に焦点をあてる	「弟の夢をかなえるために教育費を稼ぐことが自分の夢。」 「来英した目的は家族の経済援助であることに集中することで、自分を守る。」
	他者理解	差別した人の病状や教育的背景など、患者の立場を理解しようとする	「彼らはきちんと教育を受けていない」 「患者は病気でストレスをかかえているから、それ以上ストレスをかけない。」 「彼らが攻撃的になったら個人的なこととして取らずサポートする。」
	否定	差別を受け入れないと抵抗し、差別そのものを否定する	「自分は差別を受け入れたくない。差別されたかもしれない場合、自分に足りないところがあったと思ひ、差別のせいにはしない」 「昇格の機会は、人種に関係なく開かれている」
行動的 変化	職務遂行	プロとして自分の責務を完全に果たすことで、他人から責められることをしない	「患者の安全を守ることが最も大事なことで、患者の心配を無視しない。それが私の仕事だ」「イギリスのやり方を覚え、イギリス英語も話す」
	主張	職場で差別をした患者や上司に、直接にやめるように、自身の思いを伝える	「怒鳴るのはやめてください。怒鳴る必要はありません」 「なぜ、いつもこの仕事をするのは、あなたではなく、私なのですか？」 「どうしてあなたは、私と同じように速くできないのですか？」
	公的ルート	差別に対し、公的に苦情を申し入れたり、インシデントレポートに書き組織に報告する	「私は苦情をいうときには、対人関係ではなく公式にやる」 「インシデントレポートでいつでも誰もが苦情を申し立てることができる。」
	ストライキ	職場でストライキをして、公的に要求を申し入れる	「自分たちは強くなければならない。フィリピン人看護師と一緒に大使館前でストライキをする」
	回避	職場を移動したり転職したりすることで、差別や不当な扱いから距離を置く	「違約金を払って転職をする」 「私は新しい仕事を探しはじめた」

(4)日本のフィリピン人看護師との比較

来日して新人フィリピン人看護師が直面する問題として、看護手順については大方が同じという者が多く、むしろディシプリンの厳しさが語られた。しかし、日本語の苦勞は多く語られており、人手不足の施設では「日本語がわからないんだからフィリピンに帰れ」と職員に言われた者がいた。英語話者のフィリピン人でも、職場のイギリス英語を話せないストレスがあるのだから、外国語として「日本語」を習得しなければならないフィリピン人のストレスは相当である。日本では、給与や、勤務時間はフィリピンより良いが、病院に比べて介護施設では、労働力不足の環境のために低賃金、長時間労働にSWBを著しく下げ、辞めることを願う者もいた。

英国では、看護職の専門性やキャリア発展可能性に、仕事でのSWBを高めるが多く、フィリピン人が看護師長になっているケースがあったが、日本では、合格前は慢性期病棟の高齢者のケアに配属される場合が多いが、国家試験合格後も病院や配属先によるがキャリア展望がみえにくい。看護師としてのスキルを活かし自身のキャリア構築を考えていく仕組みが必要である。SWBを低める要因には、日本では、日本語で資格試験を受けるので、まず合格することが目標となり、施設でのサポート体制が不十分だとSWBが低める原因となる。合格後には病院からのサポートがなくなり自律していくときの困難状況の把握がより必要になってくるだろう。英国では、差別禁止法の制定に準じ職場でも労働者人種平等基準ができ人種や性別など属性による差別が禁じられ、違反行為への報告・訴訟制度が整備されてきた。職場での差別を減らし、適切な対処を可能とする法整備は、日本の外国人労働者を受け入れる職場に求められる。

(5)本研究から得られた知見

理論的示唆として、国際移動をした者の経験を、SWBの高低で評価する統計的手法と違い、彼らの意味付けをもとに解釈していく解釈的アプローチにより、移動者の経験に直接迫ることができるのは意義があった。マイクロだけでなく、メゾ、マクロから影響を受ける外国人看護師のSWBの実態を明かにすることができた。

日本や英国に移動したフィリピン人の事例は、文化的自己の再編過程でもある。西洋とは異なる非西洋自己観からの分析を今後進める必要がある。

また、国際移動の前の経験が移動後に影響を与えることから、移動前における移動の決定、国の選択の決定、移動後の滞在に伴う変化と、帰国が滞りの決定など、時間軸による変化をみる研究が求められる。

実践的示唆として、今後日本が外国人労働者を広く受け入れるようにする際には、受け入れ側への組織的な研修、とくに人権保護を守る態度の育成、外国人労働者の人権を守る法整備と組織での具体的な報告ルートの整備、外国人労働者と家族の生活の安定を図るための、配偶者の就労制限の撤廃が急務である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 浅井亜紀子	4. 巻 2
2. 論文標題 フィリピン人看護師の英国体験と主観的ウェルビーイング：仕事と生活に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜美林大学研究紀要人文学研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 浅井亜紀子	4. 巻 1
2. 論文標題 フィリピン人看護師の英国での就労決定までの プロセスと主観的ウェルビーイング：マイクロ・メゾ・マクロ連携モデルの視座より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜美林大学研究紀要人文学研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Akiko Asai	4. 巻 19
2. 論文標題 How foreigners experience Japan: Beyond Hofstede's model	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Intercultural Communication Review（異文化コミュニケーション論集）	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浅井亜紀子	4. 巻 24
2. 論文標題 公開シンポジウム「EPAインドネシア人看護師・介護福祉士の日本体験：10年のあゆみ」の実践とその学び	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Intercultural Communication（異文化コミュニケーション）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田真弓	4. 巻 24
2. 論文標題 Book Review 『EPA インドネシア看護師・介護福祉士の日本体験 帰国者と滞在継続者の10年の追跡調査から』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Intercultural Communication (異文化コミュニケーション)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 浅井亜紀子・久保田真弓
2. 発表標題 国際移動と主観的ウェルビーイング 在英フィリピン人看護師が経験する差別とエンパワメントー
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Asai & Mayumi Kubota
2. 発表標題 What Factors Contribute to the Happiness of Immigrants? : A Case Study of Filipino Nurses in the United Kingdom
3. 学会等名 International Academy for Intercultural Research Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mayumi Kubota & Akiko Asai
2. 発表標題 The Subjective Well-being of Filipino EPA Care Workers in Japan ---Based on Filipino Value System---
3. 学会等名 International Academy for Intercultural Research Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅井亜紀子
2. 発表標題 英国におけるフィリピン人看護師の職場と職場外における主観的ウェルビーイング
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会withソウル(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅井亜紀子
2. 発表標題 日本は外国人介護士をどのように受入れるべきか
3. 学会等名 AHPネットワークス 日本・ベトナム介護ウェビナー第3弾 「現場から、研究から・・・外国人介護士受入れのヒント」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Asai & Mayumi Kubota
2. 発表標題 What Factors Contribute to the Happiness of Immigrants? : A Case Study of Filipino Nurses in the United Kingdom
3. 学会等名 The 12th IAIR (International Academy for Intercultural Research) Conference in Rapperswil-Jona, Switzerland (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mayumi Kubota & Akiko Asai
2. 発表標題 The Subjective Well-being of Filipino EPA Care Worker in Japan Based on Filipino Value System
3. 学会等名 The 12th IAIR (International Academy for Intercultural Research) Conference in Rapperswil-Jona, Switzerland (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅井亜紀子・久保田真弓
2. 発表標題 フィリピン人看護師・ケアワーカーの国際移動を促すマイクロ・マクロ要因 ー多様化する移動ルートとE P Aー
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田真弓・浅井亜紀子
2. 発表標題 来日したE P Aフィリピン人看護師・介護福祉士の幸福観:SubjectiveWell-beingの視点拡充のために
3. 学会等名 異文化コミュニケーション学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Akiko Asai
2. 発表標題 How Foreigners Experience Japan: Beyond Hofstede ' s Model
3. 学会等名 SIETAR Europa (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akiko Asai
2. 発表標題 Taking Leadership in Career Development: Factors Influencing EPA Indonesian Nurses and Care Workers in Japan and Indonesia
3. 学会等名 International Academy for Intercultural Research (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浅井亜紀子
2. 発表標題 フィリピン人看護師の英国体験と主観的ウェルビーイング
3. 学会等名 異文化コミュニケーション学会 (SIETAR Japan)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	久保田 真弓 (Kubota Mayumi)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	2023年度は退職のため、分担者はずれた。
	(20268329)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------